

中世ヨーロッパ貴族と死の観念

ーハインリヒ獅子公夫妻の横臥像を例にー

Medieval European nobility and the idea of death,

The case of the recumbent statue(gisant) of Duk Henry the Lion and his wife

桑 野 聡

Satoshi KUWANO

Historiography points out that the concept of death has changed in various ways depending on the era and region. Chap.1 provides an overview of the study of the history of death, in which we summarize the concept of death that is considered characteristic of medieval Europe. Chap.2 examines one aspect of the transformation of the concept of death in the long Middle Ages, using the recumbent statue of Henry the Lion and his wife as representatives of the European aristocracy of the High Middle Ages (11th~13th centuries). They were positioned not only to seek their own salvation after dying, but also to play the important role of "interceding" so that their ancestors who had died first and were in purgatory and their living descendants who followed them could both obtain salvation, but the perfect balance between the official views of the Catholic Church and the pagan ancestor worship at that time was soon lost.

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災と福島原子力発電所の事故は、私たちに生と死の問題を考えさせる大きな契機となった。また自然を利用し支配してきた近代化による環境破壊が問題視されて久しいが、世界各地で異常気象による自然災害が甚大な被害をもたらしている。加えて2020年から続く新型コロナウイルス感染は私たちの日常生活を抑圧し続け、災害や環境、100年前のスペイン風邪や中世のペストの流行などが、歴史学においても注目のテーマとなっている。

病死であれ、災害などによる不慮の死、戦争や犯罪による望まぬ死であれ、人間中心・現世肯定の近代的価値観を共有する私たち、大半の現代人には、「生の終わり」は「無」に等しく感じられるかもしれない。しかし、歴史学は時代や地域によって死の観念が多様に変化してきたことを指摘している¹。これを踏まえて本論は、まず第1章で死の歴史学研究の歩みを概観し、そこで提示される中世ヨーロッパの死の観念の特徴を整理する。そして第2章ではハインリヒ獅子公夫妻の横臥像を例に、盛期中世(11~13世紀)の貴族の死の観念がキリスト教だけ

でなく、多様な社会の変容と連動しながら作り上げられていたことを確認する。

1 死の研究と中世

「死」は、以前から文学や美術史、宗教学などの主要なテーマとして扱われてきたが、歴史学では漸く1970年代前後に本格的な研究対象となり始めた²。社会史によって歴史学の新しいテーマとなった死の研究史についてフランス近現代史家の福井憲彦は、20世紀末の時点で以下のような三つの段階を経て進展してきたと整理している³。

①現実態としての死、歴史人口学的な研究とは、長期間にわたる人口動態の曲線を数量化することで社会の変化をとらえようとするもので、戦後の歴史学研究の重要な手法となった⁴。これを受けて、②人々が死をいかに生きたか現実の死を前にしての人々の態度と行為、そこに示される共通的な心性（マンタリテ）に関する研究では、例えば、M.ヴォヴェルがプロヴァンス地方の18世紀の約二万通の遺書を調査し、その内容を分析数量化された系列史とすることで人々に見られる共通的な感性の痕跡を描き出そうとした⁵。他方、Ph.アリエスは現代から歴史を遡り中世初期にまで至る1000年を超えるタイムスケールを考察の枠組みとし、米を含む全西欧的規模で包括的な死を前にした人々の態度と行為、心性の変化を図式的に提示した⁶。この「アリエスの死のシェーマ」と呼ばれるモデルは、さまざまな価値観の変容に伴う死との関係の変化を理解する上で非常に有効な指標として受け入れられた。そして次に、文学作品や「往生術」⁷のような③死について明確に表現された言説の分析が活発に展開され、その後のアリエス批判を含む現在の多様な死の研究に至っている⁸。

このように歴史学における死の研究は、この50年の間に大きく進展した。それ故、まずアリエスの理論を概観することで、中世の死の問題を考える糸口としたい。アリエスは西欧における死の観念の変容を「飼い馴らされた死」「自己の死(己の死)」「長くて身近な死」「君の死(汝の死)」「倒立した死(タブー視された死)」の5つのモデルに区分し提示した。これらのモデルは、どの時代にも誰かの中に存在しているが、歴史の中の特定の構造においてより顕著に、より多数の人々が行動した結果、その時代の特徴的モデルとして段階わけが可能となるとされる。

第一の「飼い馴らされた死」は、中世社会において主流のモデルで、現在まで存在し続ける最も古い死のモデルだとされる。キリスト教的世界観では肉体は死しても魂は死なず、この魂は「最後の審判」の時に人類全体で迎えると考えられた。つまり死は個人のものではなく、人類全体として見なされ、恐怖は「共同体全体が参加する公的儀礼の秩序の中で隠された」のである。ここにおいて死は恐怖の対象ではなく、共生するものと認識された。

第二の「自己の死」は、11世紀頃に修道士などの文字を扱う知識人層から始まり、上層エリートを中心に13～18世紀にゆっくりと明瞭化する「個人化された死」である。上記のような

「最後の審判」が世界の終わりに人類全体にくだされる、というカトリック教会の教えとは別に、多くの人々が個人の死の瞬間に審判がくだされると考えるようになっていく。この教会との考えのズレを埋めるように「煉獄」の思想が作り出され、人々は煉獄で行う魂の浄化を生前のミサや寄進、貧者への施しなどの善行を積むことで準備しようとするようになる⁹。この死の個人化は、新しい儀礼的な手続き、つまり屍体とその顔を屍衣、棺、墓碑などで覆い隠す行為が一般化することで、現実的な死の恐怖を隠すことに繋がったとされる。

第二のモデルが継続する中、中世末期(16世紀頃)からエリート層をはじめとして第三のモデル「長くて身近な死」が出現する。「死の舞踏」に始まり、ロマン主義的な「美しき死」に至るこのモデルの表出は、生の儚さを教え、「よき生」を導くものとなり、近代科学の発展とも連動して解剖学や衛生学などの分野にも繋がって行った。

一方、第三のモデルの展開と並行して、第二の「自己の死」から第四の「君の死」への移行が18世紀頃から明瞭となってくる¹⁰。死は愛する者との耐え難い別れとして非儀礼化され、個人化されながら記念化するようになった。地獄の信仰がなくなって宗教的権威は後退し、18世紀後半から19世紀に教会墓地ではない郊外への墓地移転が公共の衛生や都市計画の観点から実行される¹¹。これらの変化をアリエスは「感性における革命」とよび、夫婦と子供の愛情の価値優位や、プライバシーの成立が広範囲な感情の変化を生んだとされる。

そして20世紀に入ると更に今までとは異なり、生き残る者も死にゆく者も死を隠し排斥し始める「倒立した死」という第五のモデルが出現する。医学の発達と連動して生まれた死との新しい関係性は、第一のモデルの「死との共生」とは真逆の「死のタブー視」である。

他方、こうした社会史における死の歴史学研究に先駆けて、美術史の成果を援用して文化史家のJ.ホイジンガは、1919年に刊行された『中世の秋』の第11章「死のイメージ」で「中世末期の精神は、あたかも無常感以外の観点から死を見ることが不可能であったかのごとくに思われる。」、また「中世末期の教会思想は、死に関してただ二つの極端な見方しか知らなかった。無常に対しての、また権力、名誉、享楽の終末に対しての、さらに美の凋落に対しての嘆きと、一方至福のうちに救われた魂への喜びとの二つだった。この両極の間にあるものは無視されてしまった。死の舞踏や薄気味悪い骸骨を余す所なく描き切った作品の中で、生きた感情は石のようにかたまってしまったのだ。」と、この時代の死の捉え方の特徴を指摘した¹²。これに対して中世文学者の新倉俊一は、ホイジンガを引用しつつ、「12世紀人と13世紀以後の人々-ことに中世末期の人々とは、死に対して抱く観念が同じではないことに注意する必要があるだろう」と、中世末期の「死に対する、現世的、利己的関心」の表出が、盛期中世の死の観念と大きく異なっていることを指摘する¹³。これはアリエスのモデルに照合すれば、「飼いなされた死」から「自己の死」、「長く身近な死」への変容として見る事が出来よう。

上記のように社会史における死の研究は歴史人口学的な視点から始まったため、数量的な統

計資料の乏しい中世の研究は、この点では遅れを取る事となった。しかし、遺言や「往生術」などの文献研究、美術史や考古学の研究成果を活用して、中世の死に関する個別の事例研究が蓄積されるようになってきた¹⁴。ここで注目されるのが、盛期中世(11～13世紀頃)から確認される貴族たちの横臥像(gisant)である。この横臥像の考察を通じて、中世の死の観念が微妙に変容しながら近代化に繋がっている関係性に注目したい。

2 ハインリヒ獅子公夫妻の横臥像

前述したアリエスのシェーマに従えば、中世の死の観念は、まず避けられない死と共生することを前提とした第一のモデル「飼い馴らされた死」を基盤に、第二のモデル「自己の死」が盛期中世(11～13世紀)から明瞭化しはじめる。これは、現在の中世史研究が「12世紀ルネサンス」の特徴の一つとして指摘する「個の発見」と連動した変化で、この個人主義は、その後のルネサンスの人文主義から啓蒙主義によって近代化の重要な要素となったと言える¹⁵。盛期中世は封建社会が安定期を迎えると共に、キリスト教が各地の異教的な在来文化と融合しながら最初のヨーロッパの統合が進んだ時期でもある¹⁶。死に関しても、前述の「煉獄」思想の形成と連動して「良き死」のモデルが出来上がった¹⁷。それは、まず「死を予感すること」に始まり、自身の寿命の終わりを察した者は近親者を集めて暇乞いを行い、生前の罪の赦しを請い、その償いを周囲の者たちに指示した。終油を施し懺悔を受け取る司祭が立ち会い、遺言が作成されるようになってくる。親族への財産分与だけでなく、自身と遺族たちの加護を神に祈り、教会や修道院に寄贈や慈善事業の取行を約束し、場合によっては墓所を指定した。そして葬儀に際しては、故人を悼む悲しみが表現され、次いで赦免の祈りが行われた。その後、葬送が始まり、遺骸は帷子で包まれて棺台に横たえられ、墓所に運ばれて埋葬された。そして、この墓に「横臥像」の慣習が広くヨーロッパの貴族たちの間で普及していった。例えば、パリ近郊のサン・ドゥニ聖堂はフランス王家の墓所となり、現在は46名の王、23名の王妃、63名の王子と王女の石棺が並び、横臥像の群れが広がっている¹⁸。

ヨーロッパ地域における墓碑銘の伝統は、既にローマ時代において目覚ましい発展を遂げていた。イタリアや南仏地域に限らず、ケルンのような辺境の都市でも5世紀頃までは、ローマ系住民の故人の名前・命日・年齢、そしてこの世での足跡(事績)と顕彰の言葉などが、その肖像を伴って残されている¹⁹。しかし、この古代文明の名残は次第に失われ、古代ローマ風を好んだとされるカール大帝の石棺ですら、個人を識別できる情報や表象を記すことはなく²⁰、更に、その後881/2年冬のノルマン人のアーヘン襲撃の際に墓所が隠蔽された。それ故、後代に皇帝オットー3世がアーヘン大聖堂でカール大帝の棺を発見するために大搜索を展開しなければならなかったことが伝えられている。また中世において教会の内部や墓地の一角に個人の安息の場を獲得できたのは、一部の高位聖職者や王侯貴族に限られていた。キリスト教の受容に

伴って、肉体の死後、最後の審判を迎えるまでの間も神の恩寵の保護下にありたいという望みが古代末期～初期中世における教会内への埋葬として実行されるようになったが、彼らはその場所が特定できるような墓碑銘の明示には無関心だった。こうして忘れられていた個人のアイデンティティを明示する墓碑への回帰は、11世紀頃から再び現れ始める。

既に20世紀前半から美術史家のE.パノフスキーは、11世紀の叙任権闘争でハインリヒ4世の対立国王に擁立され、メルゼブルク大聖堂に埋葬されたルドルフ・フォン・ラインフェルデン(1080年没)の墓板(資料1)のような最古の俗人貴族の墓像に注目し、横臥像の出現と変容を考察した²¹。彼によれば、次の12世紀に皇帝フリードリヒ1世バルバロッサの盟友、宿敵として活躍したバイエルン・ザクセン大公ハインリヒ獅子公と妻マティルデの一对の横臥像(資料2)は、この頃にフランスから西欧各地に普及した横臥像がドイツ北部にも伝播したことを伝える早期の例とされる。獅子公は、1195年8月6日にブラウンシュヴァイクの宮廷で死去し



資料1 ルドルフ・フォン・ラインフェルデンの墓板(1180年以降、メルゼブルク大聖堂)
(*Heinrich der Löwe und seine Zeit. Herrschaft und Repräsentation der Welfen 1125-1235, Katalog der Aiusstellung Braunschweig 1995. Band 2.Essays*, Hg.von Jochen Luckhardt und Franz Niehoff. München 1995, Abb 174,S.280.)

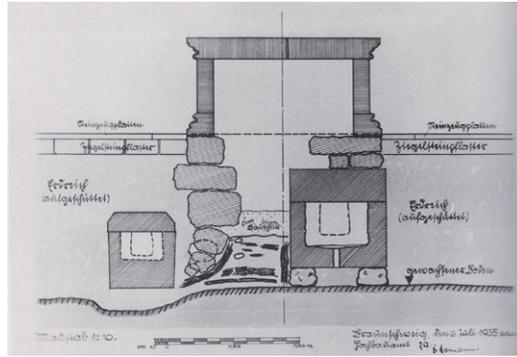
資料2 ハイリンリヒ獅子公夫妻の横臥像(13世紀前半頃 ブラウンシュヴァイク大聖堂)
(*Löwenstarke Geschichten. Heinrich der Löwe und seine Zeit.* hg.von J.Luckhardt und F.Niehoff, Braunschweig 1995. Abb.66, S.61.)

た。シュテッターブルクのゲルハルトの『年代記』には、獅子公が1195年の復活祭頃から体調を崩し、7月末には死を予感して長男ハインリヒとラッツェブルク司教イスフリートを呼び寄せ、贖罪司祭として最後の告白をし、赦しと臨終の秘蹟を受けたと伝えている²²。大公は大聖堂内に、既に1189年6月28日に32歳前後で亡くなっていた妃マティルデと並んで埋葬された。それから暫く後の13世紀前半には、大公夫妻に一組の墓碑像が設えられたと考えられている。

パノフスキーは、この持送りの上の立像であると同時に枕に頭を置いた人物像を故人の肖像ではなく「生の表象 (representacion au vif)」と評価して、14世紀以降に出現する新しい横臥像の様式である「屍骸墓像 (transi)」と呼ばれる「死の表象 (repuresentacion de mort)」と区別し、故人を理想化した完全な人間のイメージ(「全き人間 totus homo」)としての「似姿」であると解釈する²³。アリエスも「死者の身体の形をあらわすことで人々は、故人の身体的類似よりも「人格」を示そうとした」と指摘する²⁴。それ故、その仕草は神によって現世で与えられた個人の役割、社会におけるその「身分」(職能身分)を表すものとなり、その大半は「横たわった死者」でも生前の姿を描いた「生者」でもない、最後の審判において救済を得る「至福者」を表現していると考えられている²⁵。

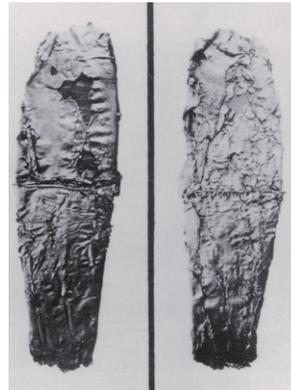
ハインリヒ獅子公夫妻の横臥像を見るならば、マティルデは両手を祈るように胸の前で合わせており、同時代人が呼んだ「信仰に生きた女性 (religiosossina femina)」の典型に対応している。ハインリヒ獅子公は左手に鞘に納められた剣を、右手にはブラウンシュヴァイク大聖堂のモデルを持っている。剣は、騎士としての責務と同時に、正義を実現する「裁判権」の保有者として領主・統治者という地位を、そして大聖堂のモデルは教会の庇護者にして奉獻者(建設者)であることを雄弁に発信している。これらの点で大公夫妻の像は、上述した横臥像の「至福者」としての特徴を忠実に描きだしていると言える。

大公夫妻の墓碑像は、ナチ政権下の1935年の調査で、元来の構造は取り除かれ、この際に墓が開封されて数組の遺骨が発見されたが、誤った調査・識別によって本来の姿が破壊されたとされる²⁶。第二次大戦後の1950年に大公夫妻の彫像と棺墓(Tumba)が復元され、最終的に1988年に柵付きの現在の姿に再建された。しかし、ハインリヒ獅子公夫妻の墓碑の棺墓部分、地下の棺、そして彫像自体にも碑文や紋章は伝えられておらず、この種の文書史料も存在しない。1707年に大公アントン・ウルリヒが大聖堂に埋葬されていた先祖の墓を整理させたとき、故人たちの名前が各々配されたが(資料3)、それが正しいという確証はない²⁷。1935年の発掘調査では、古い台座と石板の位置の約20cm下に大きな石の石棺があり、その隣には北側に木製の棺のある墓が横たわっていたことが明らかになった(資料4・5)。これには、当時の一般的な埋葬方法である人間の骨が入った革の袋が入っていた(資料6)。石棺の骨は、1974年の調査によると先天性の股関節異常に苦しむ身長の小さい黒髪の女性のものだとされ、木製の棺



資料3 ヴェルフェン歴代諸侯墓の青銅一覧表示(1707年製) (資料1に同じ、Abb.178. S.286)

資料4 大公夫妻の墓碑像と台座下の構造図 (資料1に同じ、Abb.179, S.287.)



資料5 大公夫妻の墓碑像台座下の石棺・木棺(1935年の発掘時の写真 同上Abb.74, S.65.)

資料6 石棺・木棺の中の皮袋(同上Abb.73.)

の中の骨格はより明るい髪(ないし白髪)の背の高い人のものだと考えられているが、上記のような経緯もあり、確実に獅子公のものと同定することはできないとされる。これらの墓には小さな石棺が寄り添うようにあり、おそらく旅の途中で亡くなったハインリヒとマティルデの息子の一人と思われる子供の遺体が置かれていた。

夫婦一組での墓碑像という発想はフランスよりもたらされた新しいもので、獅子公の事例はドイツで初めてのものとされる²⁸。こうした評価の背景には、大公妃マティルデの両親であるイングランド国王ヘンリ2世夫妻の横臥像がフランス、ロワール渓谷のフォントヴロー修道院に並んで安置されているという事実がある²⁹。パノフスキーは、このプランタジネット家の横臥像を掛け布に覆われた飾り寝台を用いて横たわった状態を「視覚的に明確にする」最も早い試みであると共に、同じ台座に並べて夫婦の横臥像を示すという「二度となしえないような革新」であったと指摘している³⁰。また、この当時としてはまだ珍しい様式がブラウンシュヴァイクで導入された理由を、12世紀後半にヴェルフェンの宮廷周辺で活躍したと推測されるアイルハルト・フォン・オーベルクの中高ドイツ語文学作品『トリストラント (*Tristrant*)』の最終

エピソードで、死んだ主人公トリストアンとブルターニュ王女イズルートが隣り合って悲劇的な最期を迎える場面と関係すると指摘する研究もある³¹。

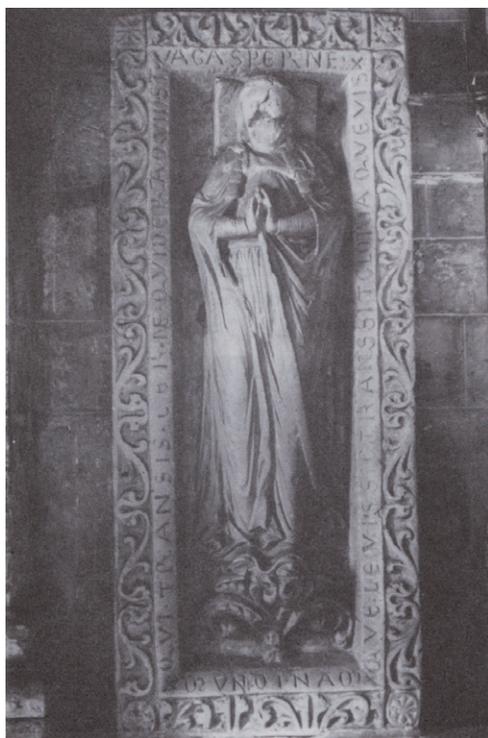
このように近年の研究は、大公夫妻の横臥像に更に盛期中世の宮廷文化の影響を見ようとしている。例えば、シトー派修道院のあったリタッグスホイザー工房周辺の職人がブラウンシュヴァイクに赴いて制作したとも推論される大公夫妻の横臥像は「枕の大きさや裾部分に表現される衣服の生地異なる質感なども夫婦が二人一組で、相互に補い合いながら全体像にまとめられている³²」と評価されるように別々に制作されたものではなく、更に大公夫妻はそれぞれ人生の最盛期の人間として表現されていると指摘される。それはまた獅子公がその成立に深く関わったとされる、12世紀末にブラウンシュヴァイク周辺で成立した匿名の作者による中世ドイツ語の散文学書『ルキダーリウス (*Lucidarius*)』において定式化されていた約30歳での死者の復活という考え方にも符合する³³。調和のとれた二人の顔は、肖像画のような特徴はないが、時代を超越した聖人のような姿に見え、13世紀の現実と結びつき、描き出された者の地位と財力を雄弁に示していると評価されている。これはまた、同時代のフライジング司教オットーが『年代記』において、アウグスティヌスに依拠しながら、最後の審判に際して「復活する人々」は生きていた頃と同じ形態＝理想的な容姿で戻ってくると考えていたことにも合致する³⁴。

更に、才女の誉れ高いエレオノール・ダキテーヌ (1204年没)³⁵とイングランド国王ヘンリ2世 (1189年没) の長女だった大公妃マティルデは、獅子公の失脚後の1180年代にノルマンディーのアルジャンタンの宮廷に滞在している間、吟遊詩人ベルトラン・ド・ボロンによって、その美しさを歌われている³⁶。それは、当時のトゥルバドール文化に特徴的な性的暗示の表現を含んでおり、「すらりとしてきゃしゃでみずみずしく滑らかで、ぴったりと優雅に衣服が体に張り付いている」という表現と墓の彫像が想起させる官能性の共通性が指摘されている。この中世のエロティシズムは、膝まではっきりと見ることが出来る男性のハインリヒ獅子公の足の容態にも表れているとされるが、現時点では推測の域を出ない³⁷。

ブラウンシュヴァイクの聖ブラージェン大聖堂の改築をハインリヒ獅子公は1173年に開始した。1188年、内陣に MARIA 祭壇が奉献されたことが伝えられており、獅子公の死後には1196年に身廊東側の十字架祭壇の奉献、1203年に南側トランセプトの奉献、1222年に教会中央にある聖バーソロミューの祭壇の地下墓地、そして1226年に上部祭壇 (Hochalter) の新たな奉献と聖トマス・ベケットと二人の守護聖人への奉献が続いたが、獅子公夫妻の墓碑像の建設年代については明確な記録が存在しない。それ故、これを従来の研究では1250年頃と推定してきたが、多くの研究者がより明確な年代と建立者の特定について、様々な可能性を提示している。この議論は「ハインリヒ獅子公夫妻の横臥像がどのような意味を持っていたか」を考える上で多くの示唆を与えてくれるため、最後に簡単に触れておきたい。

F.シュタイガーヴァルトは、獅子公の長男としてシュタウファーのライン宮中伯コンラートの娘アグネスを嫁に迎え、シュタウファー＝ヴェルフェンの融和政策を推進した宮中伯ハイน์リヒ (位1195～1212/1227年没) の時代に当たる「1225年頃」という仮説を提示する³⁸。他方、ハンス＝ヘニング・グローテは、獅子公の手にする大聖堂モデルの形状から大聖堂の高層のアーチ型窓の建設を「1230年頃」と年代決定し、皇帝フリードリヒ2世とヴェルフェンの和解が成立した(1235)獅子公の孫オットー幼童公の時代(1204～52/在位1235～52)にあたりと想定した³⁹。またB.U.フッカーはリュベックのアルノルトの『年代記』における大公夫妻が大聖堂の「きわめて注目に値する墓に」埋葬されたという文章に注目し、この年代記の成立が1210年頃であることから、皇帝となった次男オットー4世(位1198～1215/1218年没)を両親の横臥像建設者に指定した⁴⁰。更にクラウド・ニーアは、ブラウンシュヴァイク関連の史料からでは問題解決は難しいとして、大公夫妻の墓碑の影響を受けたと考えられる北ドイツの墓碑の建立年代から新しい解決の糸口を見出そうと試みた⁴¹。クヴェドリンプルクの奉献教会(Stiftskirche)にある女子修道院長の墓板(資料7)とマティルデの像が酷似しているとして、名前の分からない修道院長を1226～1232年の間に亡くなった4人の女子修道院長を対象に史料分析を行い、クラニヒフェルトのクーニグンデ(1231年没)とファルケンシュタインのオステルリンデ(1132年没)の可能性が高いという仮説を提示し、後任の修道院長ゲルトロドが彼女の前任者たちのために墓を建てるまでには更に数年が経過したとして、ブラウンシュヴァイク大聖堂のハイน์リヒ獅子公とマティルデの墓碑は、「1240年以前」に完成したものと推定した⁴²。また後にザクセン大公となる、マイセン辺境伯の一族ヴェッティナーのヴェクセルベルクの奉献教会(Stiftskirche)におけるデド5世(1190年没)と妻マティルデ(1189年没)の墓碑(資料8)が、明らかにブラウンシュヴァイクの大公夫妻の横臥像を手本としているとしてニーアは、この墓碑の注文主としてマイセン辺境伯ハイน์リヒ貴顕伯(位1221～1288)を推測した。親シュタウファー派の彼は、1210年にデドの男系後継者が断絶すると辺境伯位を取得したデドの兄弟オットーの孫で、13世紀半ばのテューリンゲン継承戦争ではヴェルフェン派の対立国王ヴィルヘルム・フォン・ホラント(位1247～56)と結んだブラウンシュヴァイクのオットー幼童公と激しく対立した。こうした状況下でハイน์リヒ貴顕伯がブラウンシュヴァイクの手本に従ってデドと彼の家族の霊廟となる教会を設えたとしてニーアは考え、シュタウファーと宥和政策を採った獅子公の長男ハイน์リヒ宮中伯が亡くなった1227年以降になって漸く可能になるとして、ハイน์リヒ獅子公とマティルデの墓碑の建立年代を「1227～1240年頃」と主張している⁴³。

こうして現時点でも大公夫妻の墓碑像の正確な建設年代は不明なままだが、その解明をめぐる議論が北ドイツにおける文化の伝播経路の問題に関連していたり、シュタウファーとヴェルフェンの二項対立という19世紀的な理解では追いつけない複雑な政治問題と密接に関係しなが



資料7 クヴェドリンプルク女子修道院長の墓碑像 (Martin Möhle, *Der Braunschweiger Dom Heinrichs des Löwen, Die Architektur der Stiftskirche St.Blasius*. Braunschweig 1995. Abb.62.)

資料8 デド・フォン・ヴェッティンと妻マティルデの墓碑 (ヴェクセルブルク、アウグスティヌス教会) (資料1に同じ、Abb.180. S.288.)

ら展開していたことがわかる。それ故、盛期中世の「横臥像」は、教会が提示する救済を求める「至福者」という位置づけだけでなく、この時代が有力諸侯の宮廷文化と家門意識の形成期であることなどを加味するならば、「一族の救済」と共に現世における支配権や相続権の正当性を主張する手段として、祖先の「追悼」もまた重要な意味を持っていたことを教えてくれる。

おわりに

ハインリヒ獅子公夫妻の横臥像は、盛期中世から現れる貴族の家門意識と「個の発見」による新しい世界観を反映する初期の事例と言える。ブラウンシュヴァイクの聖ブラージエン大聖堂内に安置されるハインリヒ獅子公夫妻の横臥像は、夫妻の死後に一族と深い利害関係を持った人々によって建立されたものであり、大公は教会の守護者にして「キリストの戦士」として、大公妃は敬虔なキリスト者として自らの存在を明確に主張している。こうして盛期中世以降の貴族たちは、一族に縁の教会・修道院の墓所でこうした祖先の理想化された似姿(至福者)と頻繁に対面し、死者も生者も共に来るべき最後の審判を待つ身であることを繰り返し確認していたのである。ここには、アリエスの「飼い馴らされた死」と「自己の死」に照合できる、異

教的な祖先崇拜の伝統とキリスト教的な世界観の絶妙なバランスによる融合を見ることができ。また世俗の権力者である獅子公夫妻の横臥像は、ヘルマースハウゼン修道院の所謂『ハインリヒ獅子公の福音書』の「戴冠図」で描かれた「皇帝一族」として大公夫妻が最後の審判での救済を求める信仰心の表現と同じように、「聖人」であるかのような姿で描かれていると指摘される⁴⁴。これは、ハインリヒ獅子公夫妻が死して自らの救済を求めるだけでなく、先に故人となって煉獄にある祖先たちと共に、自らの後に続く生ける後裔たちも一緒に救済を得ることが出来るように「執り成し」という大役を担う存在と位置付けられたことを示唆してくれる。パトリック・ギアリが指摘する聖人伝研究に基づく初期中世から盛期中世に至る中世人の死者と聖者の関係がここにも表れていると言えるだろう⁴⁵。

こうした貴族の横臥像の表現は、その後も現世での事績とそれに連なる地位や所領の継承権を後世に伝えるツールとして、紋章が共に描かれるなどの変化を伴いながら近世の絶対主義時代に至るまで豪華な霊廟の中で独自の発展を遂げた。その過程で横臥像は、盛期中世の「休息の状態にある至福者」から「横たわる(眠れる)生者」、「肱をつく瞑想者」、更には身をよじらせる「苦悶する生者」、そして当初は横臥像と共に描かれていた祈禱像が分離して、跪く「生きた祈禱像」へと、その表現を変容させていった⁴⁶。また、その一方で1300年以降の後期中世には「屍骸墓像」と呼ばれる朽ち果てた肉体を晒す、独特な表現が流布する⁴⁷。「死を思え」のスローガンと共に『死の舞蹈』^{ダンス・マカーブル}⁴⁸が描かれるのと並行して展開するこの異様な生と死の表現は、本論で扱った盛期中世に絶妙なバランスで現れたキリスト教的世界観と世俗の異教的価値観の拮抗と統合が崩れ、近代的価値観への転換が進む、一つのプロセスのように受け取れる。

盛期中世におけるハインリヒ獅子公夫妻の「横臥像」という追悼記念碑(Memoria)は、単にそれ以前の墓板の繰り返しでなく、棺墓(Tumba)の全身彫刻によってまったく新しい次元の現実性を確立した。しかし、それはホイジンガが描き出したような後期中世の「生の儂さ」を唱える死のイメージとは異なるものであり、ブラウンシュヴァイク教会のよき奉獻者として、後に続く一族の「彼岸への仲介者」であると共に、一族の支配権に対する侵害を防ぐという現実的な機能も期待されていた。これによってハインリヒ獅子公は、今日のイギリス王室に繋がるハノーファーをはじめとする北ドイツのヴェルフェン一門の新しい始祖となったのである⁴⁹。

- 1 福井憲彦『歴史学の現在』放送大学教育振興会 1997年、第5章「死生観の変化」46～55頁参照。
- 2 最初期の研究として邦語訳されているものでは、エドガール・モラン／吉田幸男 訳『人間と死』法政大学出版局 1973年(原著二版1970年／初版1951年)がある。また吉田幸男「現代文明にける死—エドガール・モランの分析」(『現代思想 特集=死 その総合的研究』Vol. 4-11 1976年)150～159頁参照。
- 3 福井憲彦『クリオとタナトス 死の歴史学』(『新しい歴史学』とは何か—アナル派から学ぶもの)講談社学術文庫 1995年／初版 日本エディタースクール出版部 1987年)136～171頁。および

- E.ル・ロウ・ラデュリ／福井憲彦 訳「新しい「死」の歴史—ショニュ、ルブラン、ヴォヴェル—」(同／共訳『新しい歴史—歴史人類学への道』新評論 1980年／1972年の学会報告を収容した原著は1978年刊行) 257～273頁参照。
- 4 E.ル・ロウ・ラデュリ／福井憲彦 訳「人口動態と社会—ワートルローからコリトンへ—」(前掲『新しい歴史』当該論文の原著は1966年) 81～97頁参照。近代ドイツの人口動態研究については、川越修「人口と家族」(矢野久・A.ファウスト 編『ドイツ社会史』有斐閣 2001年) 155-173頁。
- 5 M.ヴォヴェルの死の研究成果については、福井、前掲「クリオとタナトス」139～145頁参照。またM.ヴォヴェル／立川孝一・横原茂・奥村真理子・渡部望 訳『フランス革命の心性』岩波書店 1992年(原著1985年)の「訳者あとがき」383～393頁参照。
- 6 Ph.アリエス／伊藤晃・成瀬駒男 訳『死と歴史』みすず書房 1983年(原著1975年)、同／成瀬駒男 訳『死を前にした人間』みすず書房 1990年(原著1977年)、同／福井憲彦 訳『図説 死の文化史』日本エディタースクール出版部 1990年(原著1983年)。
- 7 スタニスラフ・グロフ／河村邦光 訳『死者の書—生死の手引き』〈イメージの博物館32〉平凡社 1995年(原著1994年)『『往生術』—キリスト教の死者の書』23～26頁参照。
- 8 M.ヴォヴェル／立川孝一 訳『死とは何か—1300年から現代まで』上下、藤原書店 2019年(原著1983年)、同／池上俊一 監訳『死の歴史—死はどのように受け入れられてきたか』創元社 1996年(原著1993年)、マイケル・ケリガン／廣幡晴菜・酒井章文 訳『図説「死」の文化史』原書房 2020年(原著2017年)など参照。また我が国における「死」への関心と学際的な研究活動の成果の一例として、馬場恵二・三宅立・吉田正彦 編『ヨーロッパ 生と死の図像学』東洋書林 2004年、に収容される8本の論文も注目される。
- 9 ジャック・ル＝ゴフ／渡辺香根夫・内田洋 訳『煉獄の誕生』法政大学出版 1988年(原著1981年)、アリス・K.ターナー／野崎嘉信 訳『地獄の歴史』法政大学出版局 1995年(原著1993年)特に第14章「中世」と第16章「煉獄」参照。また松田隆美『煉獄と地獄—ヨーロッパ中世文学と一般信徒の死生観』ぶねうま舎 2022年、参照。
- 10 1973年に米のジョンズ・ホプキンス大学で行われた4回の連続講演をまとめたアリエス、前掲『死の歴史』では「長くて身近な死」がなく、4つのモデルで説明されている。樺山紘一「死と死生観」(『歴史学事典 第2巻 からだとくらし』弘文堂 1994年) 284～286頁。
- 11 フィリップ・ブドリ／長井伸仁・長島滯 訳「墓地の発明から火葬の勝利へ—フランスにおける死の変容(18～21世紀)」(『思想』No.1150 2020年2月) 6～24頁、M.ケリガン、前掲「第6章 近代性、西洋の伝統」210～257頁参照。またドイツの事例については、原克『死体の解剖学—埋葬に脅える都市空間』廣済堂出版 2001年参照。
- 12 J.ホイジンガ／兼岩正夫・里見元一郎 訳『中世の秋』(ホイジンガ選集6)河出書房新社 1972年、267～291頁、同／堀越孝一 訳『中世の秋』(世界の名著55)中央公論社 1977年、268～289頁。また阿部謹也「中世における死」(前掲『現代思想』Vol. 4-11 1976年) 142～149頁。
- 13 新倉俊一「中世の死生観」(前掲『現代思想』Vol. 4-11 1976年) 132～137頁／再掲載「中世人と死」(『ヨーロッパ中世人の世界』筑摩書房 1983年) 37～56頁。
- 14 中世の死に関する研究では、ノルベルト・オーラー／一條麻美子 訳『中世の死—生と死の境界から死後の世界まで』法政大学出版局 2005年(原著1990年)、バトリック・ギアリ／杉崎泰一郎 訳『死者と生きる中世—ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷』白水社 1999年(原著1994年)が、アリエスの研究を補完する役割を果たしてくれる。また、個別論文としては、小池寿子「死の中世—臨終の光景」(草光俊雄・小林康夫 編『未来のなかの中世』東京大学出版会 1997年) 71～92頁、山代宏道・他『中世ヨーロッパにおける死と生』溪水社 2007年、所収の6論文など

参照。

- 15 ハスキンスの著作『十二世紀ルネサンス』に始まり、現在の盛期中世のヨーロッパ文化形成運動という評価と「個の発見」の関係については、デイヴィッド・ラスカム／吉武憲司 訳「十二世紀ルネサンス」(同／鶴島博和編訳『十二世紀ルネサンス—修道士、学者、そしてヨーロッパ精神の形成』慶應義塾大学出版会 2000年／1996年の日本講演翻訳) 27頁以下参照。そしてコリン・モリス／古田暁 訳『個人の発見 1050-1200年』日本基督教団出版局 1983年(原著1972年)参照。
- 16 クシシトフ・ポミアン／松村剛 訳『ヨーロッパとは何か—分裂と統合の1500年』平凡社 1993年(原著1990年) 61～73頁。
- 17 アリエス、前掲『死と歴史』91頁以下、同、前掲『図説 死の文化史』第3章「家から墓まで」145～211頁。またM.ヴォヴェル、前掲『死とは何か』上、251～268頁参照。我が国における中世の遺言研究の事例としては、井上浩一「遺言状からみた11世紀ビザンツ貴族のイエ」(前川和也編著『家族・世帯・家門—工業化以前の世界から』ミネルヴァ書房1993年)96～124頁、亀長洋子「遺言にみる中世人の世界—ジェノヴァの事例から」(甚野尚志・堀越宏一 編『中世ヨーロッパを生きる』東京大学出版会 2004年)193～209頁。
- 18 小池寿子「身体のかげら ルーヴル美術館、サン・ドゥニ」(『死者のいる中世』みすず書房1994年)234～277頁。
- 19 アリエス、前掲『図説 死の文化史』52頁以下。キース・ホプキンス／高木正朗・永都軍三 訳『古代ローマ人と死』晃洋書房 1996年(原著1985年)、井上泰男「ガリアの女たち—墓碑彫刻を中心に」(共著『中世ヨーロッパ女性誌—婚姻・家族・信仰をめぐる』平凡社 1986年)、島創平「ローマ人の死生観—古代ローマの墓について」(東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報』2巻 2006年)など参照。
- 20 アインハルト『カール大帝伝』第31章では、アーヘン大聖堂に金箔で飾られた台座と彫像が設えられ、碑銘に「フランク人の王国を大きく広げ、47年にわたり見事に統治した、正統信仰をもった偉大なる皇帝カールの遺体がこの墓石の下に眠る」と記されたとあるが、詳しい位置の明記はない(エインハルト／國原吉之助 訳『カルロス大帝伝』筑摩書房 1988年、41～42頁。碑銘訳は五十嵐修『地上の夢キリスト教帝国—カール大帝の〈ヨーロッパ〉』講談社 2001年、215頁より引用)。カール大帝の埋葬と棺については、Ph.アリエス、前掲『図説 死の文化史』59頁以下、N.オーラー、前掲『中世の死』166頁、三佐川亮宏『紀元千年の皇帝—オットー三世とその時代』刀水書房 2018年、216～222頁・368～372頁参照。
- 21 エルウィン・パノフスキー／若桑みどり・森田義之・森雅彦 訳『墓の彫刻—死にたち向かった精神の様態』哲学書房 1996年(原著1964年)、第三章「初期キリスト教時代と北方中世」37～61頁。ルドルフ像については、C.モリス、前掲『個人の発見』172～174頁参照。
- 22 カール・ヨルダン／瀬原義生 訳『ザクセン大公ハインリヒ獅子公』ミネルヴァ書房 2004年(原著1979年)274～276頁。
- 23 パノフスキー、前掲『墓の彫刻』51～52頁。
- 24 アリエス、前掲『図説 死の文化史』62頁。
- 25 アリエス、前掲『図説 死の文化史』75～87頁。
- 26 K.ヨルダン、前掲『ハインリヒ獅子公』275～276頁。Jochen Luckhardt, Grabmal und Totengedächtnis Heinrichs des Löwen. in: *Heinrich der Löwe und seine Zeit. Herrschaft und Repräsentation der Welfen 1125-1235, Katalog der Ausstellung Braunschweig 1995. Band 2. Essays.* Hg.von Jochen Luckhardt und Franz Niehoff. München 1995, S.283.
- 27 大公アントン・ウルリヒが用いたと推測される現在失われた追悼記録は、1400年頃に作成されて

- 1514年頃までのヴェルフェンの故人たちを記した羊皮紙で繋がれた木筒状のものだったとされる。Jochen Luckhardt, a.a.O., S.287.
- ²⁸ Klaus Niehr, D25 Grabmal Heinrichs des Löwen und seiner Frau Mathilde. in: *Heinrich der Löwe und seine Zeit. Herrschaft und Repräsentation der Welfen 1125-1235, Katalog der Ausstellung Braunschweig 1995*. Band 1. Hg.von Jochen Luckhardt und Franz Niehoff. München 1995, S.190-192.
- ²⁹ 桑野聡「コラム5 ハイน์リヒ獅子公から見える家門意識の形成」(堀越宏一・甚野尚志 編著『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』ミネルヴァ書房 2013年)122頁、において「隣にはロビン・フッド伝説の理想の君主でもある、息子リチャード獅子心王の横臥像が並んでいる」と記したが、息子リチャード夫妻の横臥像は、両親の横臥像と並んで西側(足元)に縦並びで配置されている。誤解を招く不注意な記述であり、補足して訂正したい。
- ³⁰ パノフスキー、前掲『墓の彫刻』52頁。
- ³¹ K.Niehr, a.a.O. S.190.アイルハルトと獅子公の関係については、ヨルダン、前掲『ハイน์リヒ獅子公』292～294頁。また小澤昭夫「アイルハルト・フォン・オーベルク作『トリスタン物語』前編・後編(『北陸学院短期大学紀要』第19号・第20号 1988年)149～166頁・135～157頁参照。
- ³² K.Niehr, a.a.O. S.190.
- ³³ Ibid., S.190.『ルキダリウス』については、ヨルダン、前掲『ハイน์リヒ獅子公』294～297頁。
- ³⁴ オーラー、前掲『中世の死』204～206頁。
- ³⁵ エレオノール・ダキテーヌについては、レジヌ・ペルヌー／福本秀子 訳『王妃アリエノール・ダキテーヌ』パピルス 1996年(原著1965年)、石井美紀子『王妃エレアノールーふたつの国の王妃となった女』平凡社 1988年、参照。
- ³⁶ ヨアヒム・ブムケ／平尾浩三・和泉雅人・相澤隆・斎藤太郎・三瓶慎一・一條麻美子 訳『中世の騎士文化』白水社 1995年(原著1986年)107頁。
- ³⁷ K.Niehr, a.a.O. S.192. Eike Brüggern, *Kleidung und Mode in der Höfischen Epik des 12. Und 13. Jahrhunderts*, Heidelberg 1989, S.104f. また中世における肉体のエロティシズムについては、池上俊一『歴史としての身体ーヨーロッパ中世の深層を読む』柏書房 1992年、180～183頁(文庫本としては『身体の中世』ちくま学芸文庫 2001年)、ハンス・ペーター・デュル／藤代幸一・三谷尚子 訳『裸体とはじらいの文化史ー文明化の過程の神話 I』法政大学出版局 1990年(原著1988年)、徳井淑子『服飾の中世』勁草書房 1995年所収の「マントの習慣ー『トリスタン』物語の一節をめぐって」82～97頁・「衣服の剥奪と皮衣のシンボル」150～163頁参照。
- ³⁸ Frank Neidhart Steigerwald, *Das Grabmal Heinrichs des Löwen und Mathildes im Dom zu Braunschweig* (Braunschweiger Werkstücke Bd.47) . Braunschweig 1972.
- ³⁹ Hans-Henning Grote, Die gotischen Obergardenfenster im Dom St.Blasii zu Braunschweig im Kreis ihrer historischen Abstammung, in : *Braunschweigische Heimat* 66, H.1, 1980, 1 -11.
- ⁴⁰ Bernd Ulrich Hucker, Kaiser Otto IV.(Monumenta Germaniae Historica. Schriften Bd.34). Hannover 1990. フッカーは、この推論を皇帝オットー4世即位800年記念展の論文集においても提示している。Bernd Ulrich Hucker, Otto IV.-Ein Leben zwischen dem englischen Könighof und der Braunschweiger Pfalz (1175/76-1218) . in: *Otto IV. Traum von welfischen Kaisertum*, Hg.von Braunschweigischen Landesmuseum, Bernd Ulrich Hucker, Stefanie Hahn, Hans-Jürgen Derda, Michael Imhof Verlag Pasau 2009. S.26.
- ⁴¹ Klaus Niehr, *Die mitteldeutsche Skulptur der ersten Hälfte des 13.Jahrhunderts* (Artefact Bd.3) . Weinheim 1992.
- ⁴² Ibid., S.141～144. und S.175～181. Martin Möhle, *Der Braunschweiger Dom Heinrichs des Löwen, Die*

Architektur der Stiftskirche St.Blasius. Braunschweig 1995. S.73f.

- ⁴³ Ibid.,S.354ff. Möhle, a.a.O., S.74f.
- ⁴⁴ Ernst Schubert, Drei Grabmäler des Thüringer Landgrafen hauses aus dem Kloster Reinhardsbrunn, in; *Skulptur des Mittelalters. Funktion und Gestalt*. Hrsg. Von Friedrich Möbius und Ernst Schubert, Weimar 1987. S.221f. 『ハインリヒ獅子公の福音書』の「戴冠図」に込められたヴェルフェンの特異な自意識については、桑野聡「ザクセンにおけるヴェルフェンの家系意識の形成—家系既述と政治状況の関連性に関する一考察」(『西洋史学』第179号 1995年) 19～34頁参照。
- ⁴⁵ ギアリ、前掲『死者と生きる中世』 8頁。
- ⁴⁶ アリエス、前掲『図説 死の文化史』75～135頁。パノフスキー、前掲『墓の彫刻』「第VI章 ルネサンス、その前史と後史」63～89頁。
- ⁴⁷ キャスリーン・コーエン／小池寿子 編訳『死と墓のイコノロジー 中世後期とルネサンスにおけるトランジ』平凡社 1994年(原著1973年)、M.ヴォヴェル、前掲『死と何か』上、276～280頁。
- ⁴⁸ 小池寿子『死者たちの回廊—よみがえる死の舞踏』福武書店 1990年／平凡社ライブラリー 1994年、同『マカーブル逍遙』青弓社 1995年、梅津忠雄 編著『ホルバイン 死の舞踏—新版—』岩崎美術社 1991年、藤代幸一『「死の舞踏」への旅』八坂書房 2002年、など参照。
- ⁴⁹ 桑野聡「イギリス王室のルーツを辿る—中世ドイツ貴族の世界」(『郡山女子大学紀要』第49集 2013年) 1～16頁。

追記： 本論は、本学専攻科の研究レポート浅田彩葉「画家モネと「妻カミーユの死」—19世紀フランスの死生観に関する考察」(『卒業研究の要旨』第4号 2022年、40～41頁)のためにアリエスの死の研究を共に学んだことに触発されてまとめたものである。当該学生と共に、これまでの専攻科・旧文化学科での卒業研究指導でアリエスを共に学んだ石川友美(『卒業研究の要旨』No.25 2006年、38頁、『卒業研究の要旨』No.27 2008年、52～53頁)、宗像愛深(『卒業研究の要旨』No.37 2018年、26頁)の卒業生たちにも謝意を示したい。

